

人魚の物語のハッピーエンド

2018年のフィリピン映画

山本 博之

2018年のフィリピン映画界では、興行成績で『The Hows of Us』が突出したことが話題になった。歴代の興行成績の首位が6億ペソを越えることがなかったのに対し、『The Hows of Us』は9億ペソを越え、なぜこの作品がそこまで観客を動員したのかわからないと人々に首を傾げさせた。

興行成績では首位10位に入らなかったものの、2018年のフィリピン映画で特筆すべきものとして、2018年2月14日に劇場公開された『フェアリーテイルの恋物語』(My Fairy Tail Love Story)がある。「テイル」が「tale」(物語)ではなく「tail」(尾)となっているように、これは尾ひれのある人魚の恋物語である。フィリピンで人魚の物語と言えばジェセベル(Dyesebel)が知られているが、『フェアリーテイルの恋物語』はジェセベルと異なる形で人魚の物語のハッピーエンドを提示する作品として興味深い。[山本 2018] への追記としてこの作品を紹介したい。

1. 『ジェセベル』

『ジェセベル』の原作は、『ダルナ』など多くのコミックを書いたマルス・ラヴェロが1952年から1953年に

『Pilipino Komiks』誌に連載したコミックである¹⁾。1975年には『Kampeon Komiks』誌にも掲載された。1953年に映画化され、スピンオフを含めて現在まで6つの作品が作られている。テレビシリーズは2回作られている(表1、2)。

設定や物語の筋はコミック版および映画版・テレビ版で多少の違いがあるが、多くの作品に共通する設定および物語は概ね以下のようにになっている。

ジェセベルは人間の夫婦のもとに生まれた娘である。ただし妻が妊娠中に人魚の絵や写真ばかり見ていたため、ジェセベルは足のかわりに尾ひれがある人魚として生まれてきた。人魚は人間社会に災いをもたらすと忌み嫌われており、夫婦はジェセベルを連れて離島でひっそり暮らす。海を自由に泳げるジェセベルは楽しく過ごしていたが、あるとき人間の男性フレドに恋してしまう。ジェセベルは海の魔女なら人魚を人間にすることができると教えてもらうが、人間になる前にフレドの元恋人に捕まえられてサーカスに売られて見世物になる。フレドがジェセベルを見つけ出し、サーカスから連れ出して海に戻り、海の魔女に人間にしてもらう。

表1 『ジェセベル』を原作とした映画

公開年	タイトル	監督	ジェセベル役
1953	Dyesebel	Gerardo de Leon	Edna Luna
1964	Anak ni Dyesebel	Geraldo de Leon	Eva Montes
1973	Dyesebel at Ang Mahiwagang Kabibe	Emmanuel H. Borlaza	Vilma Santos
1978	Sisid, Dyesebel, Sisid	Anthony Taylor	Alma Moreno
1990	Dyesebel	Mel Chionglo	Alice Dixson
1996	Dyesebel	Emmanuel H. Borlaza	Charlene Gonzales

表2 『ジェセベル』を原作とした映画テレビシリーズ

放映年	タイトル	監督	ジェセベル役
2008	Dyesebel	Joyce E. Bernal Don Michael Perez	Marian Rivera
2014	Dyesebel	Don M. Cuaresma Francis E. Pasion	Anne Curtis

1) ダルナおよびマルス・ラヴェロについては[山本 2016]を参照。

2. 『フェアリーテイルの恋物語』

『フェアリーテイルの恋物語』のあらすじを簡単に紹介しよう²⁾。

わがままに育てられたお嬢さまのシャンテルは、人魚島に伝わる呪いによって人魚になってしまう。運命の王子さまのキスによって呪いが解けるはずだと思いきや、幼なじみのノアに助けられながら王子さま探しに乗り出す。人気DJのイーサンに出会い、自分が人魚であることを隠しながら付き合いはじめ、よい関係になっていく。

人魚は「化け物」で、人魚を見た人は卒倒してしまう。そのためシャンテルは自分が人魚であることを隠しながら王子さま探しをしなければならない。人魚になったことを両親にも隠していたが、思い切って自分は人魚だとカムアウトすると、娘の姿を見た両親は卒倒してしまう。イーサンからプロポーズされそうになったとき、シャンテルが自分は人魚だと打ち明けると、イーサンも「化け物」と言って逃げてしまう。

人間の世界で生きていくことを諦めたシャンテルは1人で人魚島で生きていくことにする。シャンテルのことが忘れられないイーサンがシャンテルを見つけ出し、これでハッピーエンドかと思いきや、物語はここから一ひねりする。島の魔女から、真の愛があるキスによって呪いが解けて人間になれるが、かわりにキスした人が人魚になってしまうと教えられる。この条件が受け入れられないイーサンはシャンテルのもとを去る。

残されたシャンテルのもとにノアが来る。実はノアも呪いによって人魚になっていた。人魚を化け物扱いするこの世界で、ノアだけはシャンテルが人魚だと知っても驚かず、シャンテルの尾ひれを愛おしそうに撫でていたことも納得がいく。シャンテルは幼なじみのノアに恋愛感情をまったく抱いていなかったが、ノアはシャンテルに恋心を抱きながら、シャンテルが呪いを解くために王子さまを探すのを手伝ってきた。ノアがシャンテルに自分の想いを打ち明け、シャンテルもノアを受け入れ、2人は真の愛があるキスを交わす。

『フェアリーテイルの恋物語』は、トランスジェンダー

の「ミスコンの女王」の人生を描いた『ダイ・ビューティフル』を制作したジュン・ロブレス・ラナとペルシ・インタランによる作品である。『ダイ・ビューティフル』で監督だったジュン・ロブレス・ラナが脚本を書き、エグゼクティブ・プロデューサーだったペルシ・インタランが監督をつとめた。2人は2013年にニューヨークで同性婚を挙げており、公私ともにパートナーの関係にある。

この作品で人魚が何を意味するのかは観客の解釈に委ねられている。真の愛を求めていることや、人に素性を知られると忌み嫌われることから深読みを逞しくすれば、同性愛者が置かれた立場を読み取ることもできるだろう。

シャンテルに目を向けると、あるとき自分が同性愛者であることに目覚めたが、そのことをまわりの人たちに隠し続け、ようやく両親にカムアウトしたところで卒倒されてしまい、真の愛を見つけたと思っても、同性愛者であると告白したとたん気味悪がられて逃げられてしまうという話になる。ノアに目を向けると、シャンテルにとってノアは何でも相談できる幼なじみで恋愛の対象ではなく、シャンテルに秘めた恋心を抱くノアは、心中の苦しさを抱えながらも、シャンテルが真の愛を見つけるのを助けようとするという話になる。

人魚の姿になると、男女を区別する身体的特徴として最もわかりやすい部分の区別がつかない。人魚になったシャンテルとノアは2人で海中を泳ぎ、真の愛のあるキスを交わす。それによって2人とも人間に戻ったのか、それとも「人間との」真の愛のあるキスではないので2人とも人魚のままなのかは観客の想像に委ねられている。人間に戻ることを求めてきたシャンテルの希望がかなって2人が人間に戻って結ばれるという結末でもハッピーエンドだと言えるだろうが、人魚であることを受け入れて人魚のまま2人で暮らしていくという結末でもハッピーエンドではないだろうか。シャンテルが1人で生きていく覚悟を決めたとき、人魚島は人間社会から離れたさびしい場所に見えた。しかしシャンテルとノアと一緒に海中を泳ぐ様子を見ると、人魚島の人間社会と反対の側には、さまざまな海の生き物たちとともに人魚たちが自由に生きていける広大な海が目の前に広がっている。

2) 「ガラクタ風雲」(<http://garakuta.blue.coocan.jp/>) の「2018年に観たフィリピン映画」を参考にさせていただいた。

むすび

『ジェセベル』の物語世界では、人魚のジェセベルをいじめた人物が最後に人魚にされてしまうように、人魚は人から忌み嫌われる存在である。版ごとに違いはあるが、基本的にジェセベルが最後に人間になることでハッピーエンドになる。これに対して『フェアリーテイルの恋物語』では、人魚のままのハッピーエンドが提示されている。『フェアリーテイルの恋物語』で「人魚の呪い」が解けるとするのは、人から忌み嫌われる人魚から人間に戻るのではなく、自分が人魚であることを否定する考え方に囚われている状態から解放されることなのかもしれない。

参考文献

- 山本博之 2016 「脱アメリカ的正義の模索——フィリピンのスーパーヒロイン「ダルナ」」『たたかうヒロイン——混成アジア映画研究2015』、京都大学地域研究統合情報センター、pp. 8-16。
- 山本博之 2018 「聖母と人魚——フィリピン映画におけるゲイ・カップル表象」『母の願い——混成アジア映画研究2017』、京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 34-40。